

大学スポーツにおける体罰の及ぼす影響

宮崎壮之介

現在、学校部活動での体罰は問題視されている。本論では学校部活動での体罰が学生たちにどのように影響しているのかについて考察していく。

先行研究では、日本における体罰の原因として、日本のスポーツの起源が、体育による教育であったことから欧州で生まれた本来のスポーツの「遊び」「戯れ」の部分が抜けてしまい、楽しむスポーツから、きつい練習を伴うものと意識が変化していったことが明らかになった。

また、体罰は部内での力関係から選手側が体罰を容認してしまうこともあり、自身が過去受けて来たスポーツ指導体験、自己感情先行による思考・判断停止、一方的感情極まった過剰行為等の要因に起因している。スポーツ指導の体罰には、これまでの日本の教育のありようが影響しているが、やはり体罰を経験した指導者によって持ち込まれるものであると考えられる。

現在の体罰のデータとしては、国公立の幼稚園、小学校、中学校、義務教育 学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校における 2021 年度の体罰件数の合計は 485 件に上り、その中でも高等学校では、194 件と約 3 割を占めている。体罰は、無くすべきと考えられているが、部活動現場の中には、体罰が選手のメンタル面を成長させると考えている人もいることが分かった。

現在も体罰が行われていることを踏まえて、大学生を中心に今までの部活動経験における体罰についてアンケート調査を実施した。アンケートの結果から、現在の大学生の中には、体罰を受けたことのある学生も少ないとは言えないことが分かった。先行研究のなかにもあったが、やはりまだまだ体罰に関して寛容な学生も多く、そこから生まれる指導者にも不安を感じる結果となった。

アンケート結果を踏まえて、体罰は部活動を続けられない要因になることがあり、結果として理不尽な指導を乗り越えた、体罰に寛容な元選手が次世代の指導者となっていくことで、体罰の再生産が止まらない現状があるのだと考えた。指導者は、相手との体格差で手を出すか出さないか判断しており、選手の年齢が上がるにつれて精神的暴力を使う傾向があるようだ。また、部活動の縦社会からも言葉による暴力は寛容に捉えられている。

体罰は、部活動を大学まで続けられないことに大きく影響している。今後体罰が再生産されないためにも国地域の取り組みから選手を守り、部活動を続けやすいものにしていく。